京都大学総合博物館2024年度特別展
文化財発掘ＸＩ　吉田遺産探訪－遺跡・古図・剣鉾－
関連講演（2025年４月19日）

発掘調査の成果と吉田村古図の世界
－吉田泉殿の実像を求めて－

1

伊藤　淳史
京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門

2

＜本日の構成＞

- はじめに－なぜこの話題を取り上げるか－
- １．「吉田泉殿」とは
- ２．発掘調査の成果から

＜報告文献＞
伊藤淳史・笹川尚紀2012「京都大学西部構内AW20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2009年度』

- ３．吉田村古図と吉田泉殿の復元
- ４．まとめと課題

3

１．「吉田泉殿」とは

現在の
吉田泉殿町
（グーグルマップから）

4

＊泉殿：平安時代、泉の出るところに建てた邸宅の称／室町時代、庭の泉水の上につき出した建築の称（『広辞苑』第六版より

＊西園寺公経（1171～1244）が
吉田に池泉をもつ別邸を営んだ

☞現在の京大西部構内から西側一帯の地名「吉田泉殿町」は、この公経の別邸にちなむ

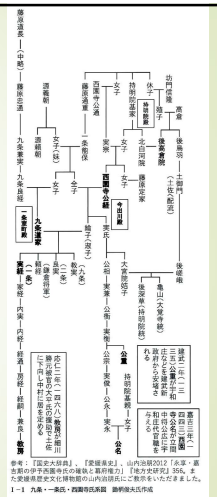
5

＊西園寺公経について

『特選小倉百人一首』
（田村将軍堂1955年）より

西園寺公経（1171～1244，承安１～寛元２）
鎌倉中期の公卿．内大臣実宗の子．母は権中納言藤原基家の女．源頼朝の妹婿一条能保の女をめとり，娘を九条道家（兼実の孫）の妻とし，幕府や摂関家と深い関係をもった．後鳥羽上皇にも信任されたが，1217年（建保５）大将の職を望んで果さず，不満の意を放言して上皇に籠居を命ぜられ，将軍源実朝の抗議で許された．この後，上皇は実朝・公経への不信を強めた．19年（承久１）実朝の死後，公経の奔走で，道家の子の頼経が鎌倉に下ったが，上皇は討幕の決意を強めた．21年，上皇が討幕の兵を挙げると（承久の乱），公経はこれを鎌倉に急報し，上皇に一時幽閉された．乱後は幕府の信頼を背に，太政大臣にまで昇り，関白道家・将軍頼経との関係に加え，孫の姞子（ﾋﾞ）を後嵯峨天皇の中宮とし，所生の久仁親王（のちの後深草天皇）を皇太子とするなど権勢を極め，また北山山荘（のち，足利氏の手に入り，そこに鹿苑寺，金閣が造営された）を営むなど，豪奢な生活を送った．→承久の乱 ⑤竜虎：鎌倉時代 下（1957），上横手雅敬：西園寺公経（歴史と人物 昭和49年12月号） 〔上横手雅敬〕

『新編日本史辞典』（東京創元社1990年）より



高知県立歴史民俗資料館編 2024『西南四国の中世社会と公家』（令和６年度企画展図録）より

6

＊文献史料に知られる吉田泉殿の盛衰

＊文献上の初出：「・・・吉田泉造改・・・」
（『明月記』嘉禄２年（1226）５月27日条／以後、明月記には記述多数）

例）夏期の納涼、競馬、射弓、酒宴等々・・・天福元年（1233）の後堀河上皇の御幸に際しては、深池を望む高楼、赤地錦で作った橋、沈香の柱、奇岩を配した庭園で風流を尽くす・・・

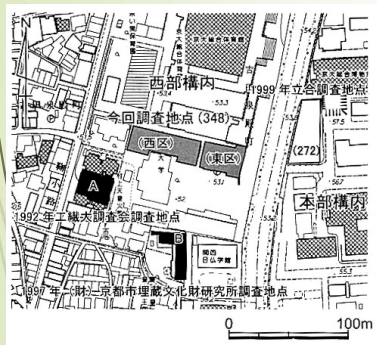
＊公経没後、所有は九条頼経、後嵯峨上皇へと移ったか？
（『岡屋関白記』）以後、後深草、亀山上皇まで（1302年）臨幸記録多数

＊14世紀初頭までで記述途絶
以後争乱により荒廃、耕地と化して伝承の存在となったか

例）吉田泉殿跡の田畠が吉田社神領として寄進される
・・・永徳４年（1384）足利義満寄進状

7

２．発掘調査の成果

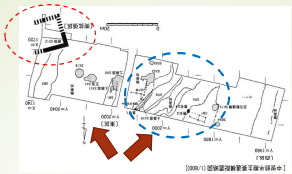


調査地点の位置
（以下図の出展はすべて伊藤・笹川2012より）

発掘調査に着手（2008年１月）・東から

8

＊中世遺構の全景

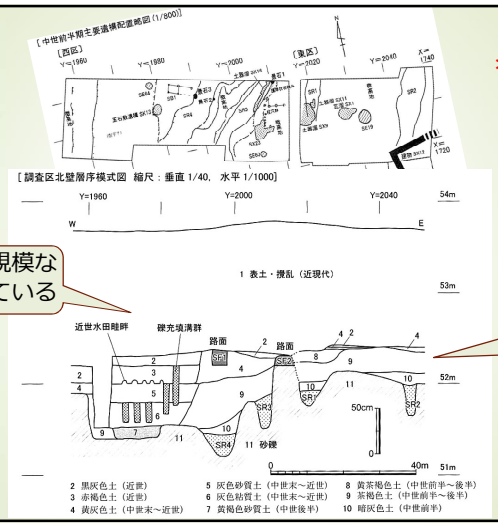


東区を北西から

西区を北東から

9

＊立地環境

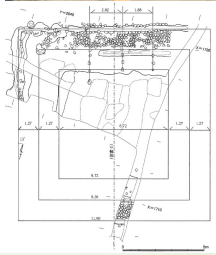


西半は近世に大規模な耕地開発がされている

総じて東半が高い地形とみられる

10

内側は礫を入れて地盤を固める地業



＊石敷もつ建物

外縁一辺が11.80mの方形建物だろう
持仏堂的な建物？

11

＊色玉石を敷いた遺構

12

＊庭をうかがわせる景観

流れの岸を保護する護岸

底には美しい砂

これは土層観察用に残した畔です

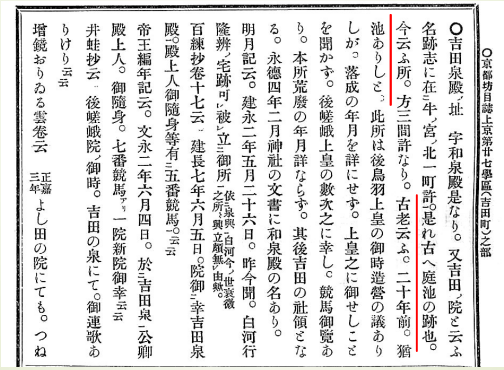
点在する景石

13

3．吉田泉殿の復元と吉田村古図

＊近世以降の伝承

庭池の跡とされるものが江戸時代には残されていたのか？


○京都坊目誌上京第十七學區「吉田町」之部

○吉田泉殿〻址。字和泉殿是なり。又吉田〻院と云ふ名跡志に在二牛〻宮〻北一町許一是れ古へ庭池の跡也。今云ふ所。一方三間許なり。古老云ふ。二十年前。猶池ありしと。此所は後鳥羽上皇の御時造營の議ありしが。落成の年月を詳にせず。上皇之に御せしことを聞かず。後嵯峨上皇の數次之に幸し。競馬御覽あり。本所荒廢の年月詳ならず。其後吉田の社領となる。永德四年二月神社の文書に和泉殿の名あり。明月記云。建永二年五月二十六日。昨今聞。白河行隆辨〻宅跡可二被一立二御所一依二泉興一之所〻興立都無〻由歟。百練抄卷十七云。建長七年六月五日。院御二幸吉田泉殿一殿上人御隨身等有二五番競馬一云云

帝王編年記云。文永二年六月四日。於二吉田泉一公卿殿上人。御隨身。七番競馬〻一院新院御幸云云

井蛙抄云。後嵯峨院〻御時。吉田の泉にて。御連歌ありけり云云

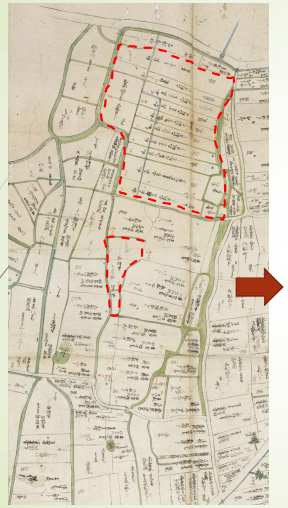
増鏡おりゐる雲卷云　正嘉三年　よし田の院にても。つね

鴨川ノ東昔吉田社西北二泉殿ト號スル田地有リ
水石跡残レリ
『山城名勝志』一七一一年より

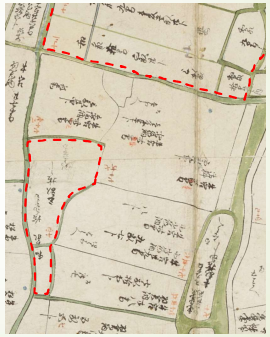
雑井小三郎編1911『京都坊目誌』より

14

＊吉田村古図にみる字「和泉」



（拡大）

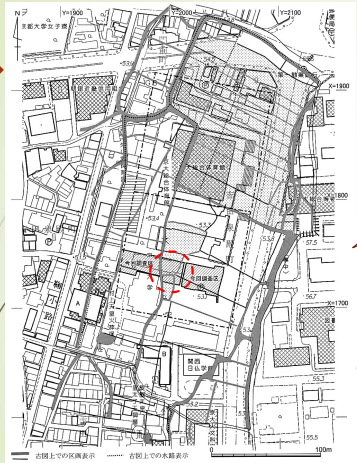


字牛ノ宮の中に和泉の飛び地が存在する

京都大学総合博物館蔵
「山城国吉田村古図」部分に加筆

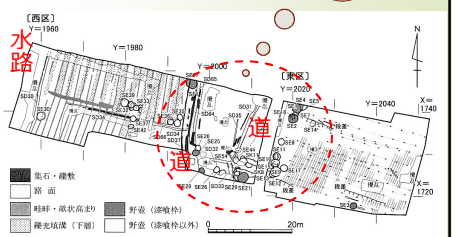
15

＊現況地形と重ね合わせ



近世の調査成果と古図の道や水路等は概ね対応している

二つの道に挟まれた範囲に空閑地



16

＊謎の空閑地は池のなごりか？

遺構のみつからない範囲

頭の出ている巨岩周囲を調べる

17

＊発掘された景石の埋積状態

近世の堆積

頂部は現代の構造物で破壊

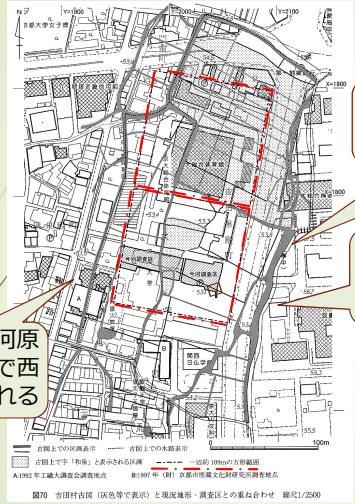
最下部は砂の堆積する流れの跡

中世の堆積
（土師器や礫で埋まる）

☞池として遺存はしていないが、荒蕪地として利用されていない空間であったとは言える

18

＊範囲の想定復元



字和泉の飛び地が池跡と想定
→中央に置いてみる

方形建物の東側は2m以上の比高差で高まる
→東に敷地を広げる余地なし

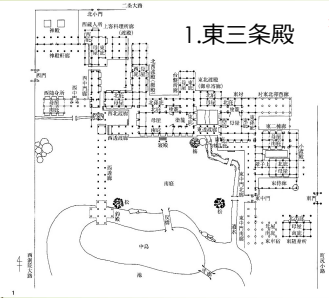
微高地や河原（当時）で西側も限られる

☞東西は約109m（1町）程度

☞寝殿など主要建物は北側では？
→北側にもう一町四方を想定
（≒字「和泉」の範囲に相当）

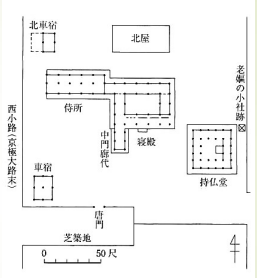
19

＊建築史による貴族邸宅の復元例



1.東三条殿

2.法住寺殿



3.藤原定家京極邸

1と3：
日本建築学会編2008『日本建築史図集』新訂第２版より
2：足利健亮編1994『京都歴史アトラス』中央公論社より

20

4. まとめと課題

＊発掘された中世・近世の遺構、古図に残る「和泉」の位置、地形環境との兼ね合いから、吉田泉殿は現在の西部構内に１×２町程度の範囲を想定できる

＊鎌倉時代の盛衰を伝える記録、近世まで痕跡が残っていたとする伝承と、発掘で確認される状況とは、おおむね符合している

＊水利・水源をどのように求めたのだろうか

＊範囲や内部を示す直接的な遺構のほとんどは、まだ不明

＊主要部分は西部構内北半にまだ遺存している可能性が高い
（今回確認面は現地表下２m以上）